◇ ドキュメンタリー余話 ◇

百余年前論文の真相を追う

― 奇形児遠友夜学校の謎 ―

編集著作者　白　佐　俊　憲（遠友夜学校研究家）

監修発行者　正　倉　一　文（随筆春秋事務局長）

初 版 発 行　2025（令和7）年１月15日

発　行　元　随筆春秋ポータル

印刷委託先　製本直送ドットコム

ドキュメンタリー余話

百余年前論文の真相を追う

― 奇形児遠友夜学校の謎 ―

＜1＞

私・白佐は、130年前の1894（明治27）年１月に新渡戸稲造が札幌に創設した「遠友夜學校」に関する埋もれたままの文献を探していた。思いがけず、この学校の開設21年後の1915（大正４）年12月に公表された論文「教育界の畸形兒遠友夜學校」のタイトルを目にした。発見したのは2023（令和５）年９月で、この論文は１世紀以上も前に教育雑誌に発表されたものであった。

論文発表当時は、遠友夜學校の創設者で初代校長の新渡戸は、校長在任のまま東京などの教育界において活躍中で、国際連盟事務次長に就任する以前の時期であった。不在校長の代理も務める遠友夜學校代表は、有島武郎が退いて、蠣崎（かきざき）知二郎が第４代目を務めていた。

遠友夜學校50年の歴史の中で既に20年を経過していたが、まだ「札幌遠友夜學校」と称する以前の時代であり、学校の発展はまだ初期の段階、私立学校の認可を受ける直前だった。１回目の校舎の増改築後、収容総定員を120人とし、２学年で１教室を使う複式学級で、教室は４室

（４学級編成。尋常科１・２年、同３・４年、同５・６年、高等科１・２年）。授業は１学級（２学年）に教師２人を当てる体制を確立したばかりの時期であった。実際の通学人数は定員を下回っていた。

典拠（出典）がはっきりとしている体裁の整った論文としては、私が確認し得たものの中では一気にトップに躍り出たとみなせるほどの古い文献の発見であった。

大喜びしたことは言うまでもないが、正直に言えば、実は初の出合い時には、「え、何だって！」と、驚きの声を発するものだった。

なんと、タイトルで「遠友夜學校」が「教育界の畸形兒」と表現されていたからである。

「畸形兒（奇形児）」という言葉に接したとき、人々はどんなイメージを抱くであろうか。文字どおり、辞典には「奇形を有する小児」とあり、一般的には「身体的に欠陥や異形・異常を持った子供」と、想像するのではなかろうか。私も、そのようにイメージした。

身体的には普通の子供等が通ってくる学校（施設）であったから、身体に障害や不自由を伴う者のための学校だとは誰も思い描かない。

そうすると、「教育界の畸形兒遠友夜學校」とあれば、未知の人であれば、教育界にあって「遠友夜學校」は「畸形兒のような学校である」とか、「畸形（欠陥）のある学校だ」とか、「一風変わった学校」とかと思い浮かべてしまうだろう。差別感情や先入観をもって見ようと意識するわけではないが、つい、あまり好感の持てない、歓迎されない学校なのかな、と想像してしまうのではなかろうか。

私もこの文献の存在を知って、やはり同様に思い描いてしまった。この記述については、以降、ついついこの意味での理解・解釈を前提で語ることになる。

私は、監修発行者・正倉一文（本名・小倉一純）氏の尽力を得て、2023（令和５）年５月、著作年譜『遠友夜学校の遺産はどう伝承されたか―新渡戸稲造の夢を未来につなぐ年譜―』を電子出版し、同年10月には、さらに『増改版』も出した。

初版時には、まだこのタイトルの論文に出合えていなかったので、この論文について何も記していない。『増改版』にも、論文タイトルと執筆者名・加茂正治など若干の関係事項を載せたが、その論文自体は容易に入手できず、読んでいない状況にあったため、どんな内容かわからず、周辺情報を調べ簡単に収載するだけにとどまった。

とりあえず、タイトル「教育界の畸形兒遠友夜學校」という論文の存在だけを記したような紹介であった。『増改版』のp.57～58に追加した１項目がこれである。

詳細は省くが、内容確認の調査が難航し、論文自体の複写資料を入手できなかったことから、「国立国会図書館情報、内容未確認文献」と記し、曖昧な不完全情報を記述しただけだった。

＜2＞

その後、2023（令和５）年も暮れになり、妙に気になる事柄として、その論文の存在が頭に居座り続けていることを自覚した。そしてその記憶は、機会あるごとに、このままの記載にしておいてもいいのかと、私の本意を確かめてくるのであった。

時には、あれは１世紀以上も前に著された文献であり、「新渡戸稲造博士の遠友夜学校精神」に疑念を投げかけた最初の貴重な文献ではな

いのか、次の改訂版ではもっときちんとしたデータとして整えて載せるべきではないか、と私は強く促されるのであった。

これを受けて私は、思いも新たに強くし、未確認文献として載せた論文の追究調査をやり直し、何とかして論文自体のコピーを入手すべく再挑戦することにした。

ところが、開始早々に思わぬ形でつまずいてしまった。情報源記述の実際の確認から始めるため、「国立国会図書館デジタルコレクション」で検索してみると、自ら著作に「国立国会図書館情報」と示していたのにもかかわらず、ヒットしない。

正確には、ヒットはするのだが、あらわれるのは自らの著作の『増改版』の記述だけである。つまり、検索は空回りの状態であって、論文「教育界の畸形兒遠友夜學校」の存在、その情報源を探し当てることができないのである。

ここで、私は自ら犯した誤記載に気づかされた。マウスを握る手のひらに汗がにじんだ。

これでは、肝心の情報の出所（典拠）自体が不明ということになる。私は大いに焦ってきた。そこで、もう１つ、よく使うインターネット上の「Google検索」も試してみた。しかし、やはりヒットしない。

大いに焦り、いろいろと繰り返し試してみた。だが、やはりそれらしきものに行き着くことができなかった。これでは、私が架空の文献をもっともらしくでっち上げて、掲載したことになる。私はいよいよ焦ってきた。

『増改版』に載っている文献事項は、改めて確認すると、次のように示されていた。３分割された論文となっている。（次記の括弧内は、著者・白佐が補った事項である）

加茂正次（著者名）、「教育界の畸形兒遠友夜學校」（論文題名）、『教材研究』（掲載雑誌名）、①1915年（大正４年）12月１日発行、第13巻第12號、p.64～66（掲載年月日・巻号・収載ページ）、②1916年（大正５年）１月１日発行、第14巻第１號、p.61～63（前同）、③同年２月１日発行、第14巻第２號、p.66～67（前同）。

これを眺めていると、もし架空のデータであったならば、こんなに詳細かつ明確に示したのは不自然である。なぜすぐに露見する事柄を具体的に書いたのか。そう思って落ち着いて考えていると、私の頭の中では、逆に記述内容の真実性の自信が増し、存在した事実を確信するに至ったのである。

そして、「国立国会図書館情報」としたのが思い込みで、これは別な着想から探し得た情報であったに違いないと、探し方を別の発想に転換させた。

キーワードを変えた手掛かりを求めて、2023（令和５）年夏季に残したメモ書きの山に分け入った。間もなく「いい予感」がして使ってみた検索語の中に、「◎印」が記された用語「学術機関」が見つかった。Google検索の結果、列記し示された事柄の中に「学術機関リポジトリデータベース」（IRDB）が候補の１つとして示された。これだと私は直感した。

この入力欄に検索語「教育界の畸形兒遠友夜學校」の文字を打ち込んでみると、大阪教育大学附属図書館所蔵の詳しいデータ（資料・情報）があっという間に提示された（次ページ上）。照合して、データは前記掲載内容とピッタリ一致した。やはり、確かにあった。

まずは、実在が確認できて、私はほっとした。どうやら、「IRDB」だけにしか載っていないデータらしいが、とにかく事実として存在して

教育界の畸形兒遠友夜學校

加茂, 正次

収録誌名 : 教材研究

巻 : 13 号 : 12 開始ページ : 64 終了ページ : 66

日付 : 1915-12-01

大阪教育大学リポジトリ : 大阪教育大学

教育界の畸形兒遠友夜學校

加茂, 正次

収録誌名 : 教材研究

巻 : 14 号 : 2 開始ページ : 66 終了ページ : 67

日付 : 1916-02-01

大阪教育大学リポジトリ : 大阪教育大学

教育界の畸形兒遠友夜學校

加茂, 正次

収録誌名 : 教材研究

巻 : 14 号 : 1 開始ページ : 61 終了ページ : 63

日付 : 1916-01-01

大阪教育大学リポジトリ : 大阪教育大学

いた。この場に及んで、「国立国会図書館デジタルコレクション」に未収録の貴重なデータも実在することを思い知らされた。埋没していた宝物の発掘を改めて実感してホットした。

国立情報学研究所の説明によれば、「IRDB」とは、「学術機関リポジトリポータル＝Institutional　Repositories Data Base」の略語で、日

本国内の学術機関リポジトリに登録されたコンテンツ（情報内容）のメタデータ（データについてのデータ）を収集し、提供するデータベース・サービスである。

受け売りの知識を披露すれば、「リポジトリ」とは、さまざまなデータ、情報、知識や成果物を蓄積するデータベース（整理集積された情報）のことである。

このデータベースを以前に見て知ったにも関わらず、私は当然のように、情報源は「国立国会図書館デジタルコレクション」だと、思い込んでいた。先入観にとらわれてしまい、そう確信して（間違って）載せたのであった。

照合作業をしていて、思い出した。基礎情報は『増改版』にも載せ得たものの、論文自体の複写依頼を所蔵大学図書館へする段階で、地域図書館を経由して行うにしても、あれこれと手続き上のハードルや壁が立ちはだかることを知り、時間がなかったので、私は結局、論文複写データの入手を早々と断念したのであった。

この時点に及んで、論文記述の具体的な内容を知るためには、何としても、以前に諦めたハードルや壁を越える再挑戦しなければならないと思った。

それしか難題克服の途はないと、私は観念した。

＜3＞

これ以降は新しく試みる核心追究の段階に入るので、関係分に限るが、具体的に詳しく述べることにしたい。

老体・無知の身では、メールによる図書館の「レファレンス（調査相談）サービス」に頼るのがやはり実現性が高い。まず、地元「札幌市（中央）図書館」の「メールレファレンス」の申込フォームに必要事項を書き込んで相談を投げかけた。2023（令和５）年の年末12月30日、次の照会・依頼文を送った。

【質問内容】下記の雑誌記事の複写物入手を切望しています。たぶん「大阪教育大学附属図書館」に所蔵の資料と推測されます。公共図書館連携の仲介手配の労を頂ければ入手の道が開けるのではないかと思います。該当部分のコピー入手のご支援・ご助言をお願いいたします。
【調査済事項・雑誌記事】著者：加茂正次（大阪府師範學校々友會員）、記事名「教育界の畸形兒遠友夜學校」（３回分割掲載）、……（中略。前記と同じであるため）……。

次の言葉も括弧書きで加えた。
（以上の文献事項は当方の理解・判断によるもので、実際のものとは「ずれ」や誤記・欠字等があるかもしれません。適宜ご判断の上、善処願いたい）
これに対して、2024（令和６）年１月13日に、「札幌中央図書館利用サービス課調査相談係」から次のような回答があった。

【回答】13巻12号、14巻1号、14巻2号を所蔵している大阪教育大学附属図書館を確認したところ、ホームページに文献複写申込について

記載がありました。この中の支払い方法について、請求先が個人名ではなく機関名になるとありますが、札幌市図書館では、複写物を他機関から取り寄せる際の支払い方法として、請求書の宛名を個人の利用者名で発行していただける図書館のみ仲介をしております。大阪教育大学附属図書館に、図書館名（個人名）という形でお願いできないか、電話で確認してみましたが、やはり個人名での発行には対応していないとのことでしたので、大変申し訳ありませんが札幌市図書館では仲介することができません。北海道立図書館でも複写の仲介を行っているようですので、よろしければそちらにお問い合わせ下さい。また、大阪教育大学附属図書館以外で13巻12号を所蔵している図書館は、見つけることができませんでしたが、14巻1号・2号は大阪府立中之島図書館で所蔵しています。郵送（文書）やインターネットでの複写サービスも行っているようですので、下記ホームページ（省略）をご確認下さい。

やはり全論文を入手するにはどうすればできるのかがわからなかった。いったん諦めはしたが、やはり気になるので気を取り直して、2024（令和６）年９月11日、今度は依頼内容の観点を変え、「北海道立図書館」へメールで照会してみた。

【質問事項】大正時代、加茂正次という人が、新渡戸稲造が創設した遠友夜学校を「教育界の奇形児」とみなしたようですが、何をもってそのように呼んだのか、理由・由縁を知りたい。
【質問の出典や情報源、調査済み事項】加茂正次著論文「教育界の畸形兒遠友夜學校」教育雑誌『教材研究』第13巻第12号（1915年12月）、第14巻第１号（1916年１月）、第14巻第２号（1916年２月）に掲載さ

れた、とされる。雑誌を所蔵していると思われる図書館へコピー依頼等をしようと努めたが、いろいろと障壁があって個人の努力では実現できていない。

これに対して、「北海道立図書館一般資料サービス課」から、同年９月29日の中間回答に続いて、同年10月１日には本回答があった。両回答を合わせた要点は次のとおりであった。

【回答事項】

［1］雑誌３号全てを所蔵している大阪教育大附属図書館に雑誌の掲載及びその内容についてレファレンスを依頼し、次の回答を得ました。

当該雑誌３号の所蔵及び記事の掲載について確認。第13巻第12号「序言」に以下の一文があり。「題して、「教育界の畸形兒」とせしは何の故ぞ。乞ふ、奇彩を放てる本校の有様を通讀せられむことを。」ただし、第14巻第２号の「結論」に、理由や由縁として挙げられるような文章の明記はなし。要約では正しい意図を伝えできかねるため、全文の通読を勧める。なお、論文の複写依頼については、大阪教育大で個人の受付を行っていず、当館でも支払いの仲介は行っていないため、こちらに依頼する場合は、お住まいの市町村の図書館に相談されることをお勧めいたします。

［2］また、14巻の２号分のみの所蔵になりますが、大阪府立中之島図書館に、複写申込みについて照会したところ、次の回答がありました。

（以下、大阪府立中之島図書館からの回答です）

申し訳ございませんが、当該資料は資料状態が悪いため雑誌原本からの複写はお断りしております（閲覧もできません）。マイクロフィル

ムでの閲覧、複写利用となります。マイクロフィルムも移転対象資料のため、複写お申し込みは11月１日以降でお願いいたします。当該マイクロ資料はOPACに登録していないため、お申込みは文書かFAXになります。文書（ハガキ等）による複写申込につきましては、「中之島図書館　利用の手引き★資料を複写するには…」をご覧ください。資料情報として、「『教材研究』14(1)（F／1737)、14（2）（F／１737）（新聞書庫　マイクロ)、レファレンスNo.45で照会済」とお書きください。またメールアドレスのご記入もお願いします。複写の料金・送料については、複写業務担当業者から後日お知らせします。入金確認後、複写作業を開始し、郵送でお送りいたします。担当：大阪府立中之島図書館ビジネス資料室。

［3］当該論文以外に、遠友夜学校が加茂氏により「教育界の奇形形児」とみなされた記述等がないか、当館所蔵の関連図書、雑誌記事を、目次等により探しましたが、見つけることはできませんでした。

一縷の望みを託して尋ねてみたが、指導は手続きに終始。面倒・不可能を匂わせて、やはり手続き・送金は手数でも自分でやりなさい。入金がなされれば複写物を送りますよ、というお役所的指導にすぎなかった。北海道立図書館と、政令都市・札幌市図書館との相互理解・役割分担・情報交換も十分になされていない。ましてや大学などの異種図書館との相互ネットワークなどは遅れていて、現段階ではほとんど確立されていないこともわかった。

ここで、次のような雑念も私の頭の中をよぎった。

手間暇のかかる程度によって異なることは言うまでもないが、普通、複写料金は、２ページ分Ａ３判でも白黒コピーなら１枚10～40円程度

である。今回の文献の場合は、どうみても10枚に達しない分量と予想される。郵送料を含めても数百円程度で済む料金を巡ってのあれこれのやり取りであった。

なお、「OPAC」とは何かがわからなかったので、調べたところ「オーパック（Online Public Access Catalog）」といい、「図書館が所蔵している図書や雑誌などの資料を検索できるオンラインの蔵書目録」だそうだ。「当該マイクロ資料はOPACに登録していないため、……」ということは、資料によって、オンライン蔵書目録に登録しないものもあり、図書館自体が所蔵資料の容易な活用を閉ざしているものがあるということらしい。

＜4＞

以上の２つの図書館からの回答には、残念ながら希望の助け舟を配慮してくれたとは受け止められなかった。相変わらず、今後の実施過程ではやはり難航が予想され、勇んで次の作業に励む気持ちにはなれなかったのである。図書館の対応は「宝の持ち腐れ」を地でいこうとする消極さで、資料活用者に喜んでもらう途を開こうとする気持ちがないような気がした。

図書館側には、共通して「迷惑だ、お断わりだ」の精神が垣間見えるような気がした。地域設置図書館は規則第一にして事なかれ主義を貫いているのだろう。文献資料を大切に保存・保管するのが「主」で、有効に活用するのは「従」なのであろう。予算が足りないと言いながら、なぜ現代の進んだ安価な手段を活用しないシステムを運用し続けてい

るのであろうか。図書館職員の高齢化が、最先端技術の活用を阻んでいるのかもしれない。……。

だが、不満足感の反発の気持ちが、新たな方向の転換を決意させる動機にはなった。この時、打開策につながるヒラメキを覚えたのである。著者が何者かがわかれば、糸口がつかめるかもしれない、と。

迷惑を顧みずこれが最後と、2024（令和６）年10月１日、「北海道立図書館一般資料サービス課」へさらに次の質問を重ねてメールした。「米寿を迎えた高齢者には、方法上の諸壁に阻まれてなかなか図書館にある文献内容にたどり着けないのはとても悲しい現実です」と泣き言を添えた。

【質問事項】当該論文の執筆者「加茂正次」という人物の掲載論文の「肩書」あるいは「所属」はどう記載されているか。（別途の探索・追究の可能性を求めて）

これに対しては、同年10月８日、「北海道立図書館一般資料サービス課」から次の回答があった。

【回答事項】加茂正次氏の「肩書」「所属」について、大阪教育大附属図書館にレファレンス依頼し、次の回答を得ました。

回答：第13巻第12号 → 札幌農科大學學生、第14巻第１号・第２号 → 札幌農科大學生。

この最後の回答には、いささか拍子抜けした。掲載誌『教材研究』は、当時の「大阪府師範學校々友會」が編集・発行していたので、同校友會

員が「遠友夜學校」を単刀直入に「畸形兒」と言い切った論文とばかり思っていたからである。気づいてみれば、自分の思考の柔軟性が失われていたことに、私自身が苦笑した。

しかし、意外や意外、想定外のことが事実だった。「札幌農科大學」の学生が投稿したものであるとされることや、微妙に肩書（所属）名、つまり大学名が異なることには、少なからず違和感を超えた情報を伝えてくれた。

やはり、このことが端緒になり、新たな展開に発展する期待が持てそうな予感をした。面白い。思わず私は膝を打った。

＜5＞

まず、著者・加茂正次の所属大學のことだが、現在の「北海道大学」の前身であることは間違いない。北海道大学の沿革をおおざっぱに確認してみると、次のようになる。

◎1876（明治９）年８月14日、「札幌農學校」を開校（正確には、開設時は「札幌學校」といい、同年９月９日に「札幌農學校」と改称した）。
◎1907（明治40）年９月１日、「東北帝國大學農科大學」と改称。（大學昇格による）
◎1918（大正７）年４月１日、「北海道帝國大學」と改称。（正確には、1919（大正８）年４月１日までの１年間は「北海道帝國大學農科大學」と称した）。
◎1947（昭和22）年10月１日、「北海道大学」と改称。

「札幌農科大學」という名称の時代はなかったのである。論文の発表は1915（大正４）年12月１日～1916（大正５）年２月１日であるから、加茂の肩書（所属）は「東北帝國大學農科大學」でなければならない。それが、歴史上存在しない「札幌農科大學」とあるのはおかしい。

本人が大學名を間違えて書くことはあり得ないだろうと考えると、①学生・加茂正次の名前を使って他人が原稿を書き、本人の了解を得て投稿した、②學生・加茂の投稿した原稿を下敷きにして、他人（編集者？、教育関係の知人？、家族？）が手を加えて載せた、このどちらかではないか。②の可能性が高いとみるのが順当なのではなかろうか。

念のため、「加茂正次」の学歴関係を調べてみた。補足的事項としてどれにも「大阪府、平民」と書き添えられているので、この論文の執筆者は、大阪府の出身であり、大阪で発行の掲載誌の関係者と強いつながりを持っていたから、予科の学生（今の高校生）でも投稿し得たと推測される。

◎1913（大正２）年９月11日、東北帝國大學農科大學豫科に入学（文部省発表。同年７月11日発行『官報』第285號による）。
◎1916（大正５）７月６日、東北帝國大學農科大學豫科（３年課程）を卒業。同年９月？日、東北帝國大學農科大學農学科第２部に入學（東北帝國大學農科大學編『東北帝國大學農科大學一覧／自大正５年至大正６年』1916年12月25日発行）
◎1919（大正８）年７月４日、北海道帝國大學農學部農學科第２部（３年課程）を卒業、農學士（北海道帝國大學編『北海道帝國大學一覧／自大正７年至大正８年』1919年12月25日発行。1918（大正７）年４月

１日、大學名改称）
◎1919（大正８）年10月11日、東京帝國大學法學部法律學科で入学宣誓（文部省発表。同年10月20日発行『官報』第2163號による）。

この経歴から、論文掲載時の加茂の所属は「東北帝國大學農科大學」の豫科第３年次（予科３年生）に在学中であったことが裏づけられた。大學の予科は、中學校卒業者を対象とした高等普通教育課程で、大學本科への入學以前の予備の課程であった。農學部農學科第２部（夜間大学？）を卒業後、すぐに東京帝國大學法學部法律學科に進学したことも明らかになった。

また、予科学生の時代、学生教師を遠友夜學校でしていたのではないかとの予想の下、過去記録を探してみた。いろいろ探して、ただ１つながら「加茂正次」が登場する次の文献記述を探し得た（括弧内の記述のほとんどを、著者・白佐が補った）。

◎「大正４年（1915年）新学期（４月）には、まえからの野中（時雄）、渡辺（侃）、芹川（醒）らがなお教師で、秋場幸平、高松三守、橋浦季雄、加茂正次、山口茂雄、福士貞吉が、５年に奥井菊臧、６年には三田智大、篠崎修三（のち、松本菊次郎と改姓名）、高橋節雄らが加わる。この間教務・庶務に当たったのは主として野中だった」（須田政美「遠友夜学校の歩み」p.32～85のp.56、札幌市教育委員会文化資料室編『遠友夜学校』さっぽろ文庫18、札幌市・札幌市教育委員会、1981（昭和56）年９月１日発行）

意味することがよくわからない部分があるが、これは記録集などか

ら集めた資料なのであろう。1915（大正4）年４月時点で、加茂は遠友夜學校の教師をしていたと想定できる。予科の３年次学生で矛盾しない。１,２年前から遠友夜學校で教師をしていて、このころは論文を書いた時期だったかもしれない。

この夜學校に関心を寄せて、１年次又は２年次から志願して学生教師を続けていたとすれば、「畸形兒」などと悪口を出身地の教育雑誌に書いて広報するだろうか。意図するところは、逆の意味ではなかったか。時代の変化で、用語「畸形兒」の使い方・受けとめ方の意味の変化も考慮しなければならない気もする。謎はさらに深まった。

＜6＞

前にあげた図書館調査によると、論文の「序言」には「題して、『教育界の畸形兒』とせしは何の故ぞ。乞ふ、奇彩を放てる本校の有様を通讀せられむことを。」と書かれているそうだ。

言い換えるほどもないが、あえて現代語で表現してみると、「題名を『教育界の奇形児』としたのはなぜか。お願いしたい。奇彩を放つ遠友夜学校の概況を通読されることを」となろうか。

ここで検討を要するのは、微妙な「奇形（畸形）」と「奇彩」という表現である。『広辞苑』などの辞典には「奇形」の語はあっても、「奇彩」の見出し語はない。「異形」や「異彩」ならどの辞書にもある。

岩波書店発行『広辞苑』最新第７版（2018（平成30）年１月12日発行）によると、「奇形・畸形・畸型」とは「①普通とは異なった珍しい姿・形。②普通一般の体制と比べで過剰・欠損などがある、生物の形態

上の異常（例示略）」とあり、「奇形児・畸形児」は「奇形を有する小児」とある。「異形・異型」もあり、「①普通とはかわったかたち。②型が異なっているもの」とある。

「異彩」とは「異なった色どり。転じて、他とひどく異なった趣。きわだってすぐれた様子」とある。用例で「異彩を放つ」とある。この場合は一般的に、「他とは異なる優れた点がある場合に使われるほめ言葉であり、悪い意味で使われることはない」とされる。

ちなみに、「奇才」は「世にも珍しいすぐれた才能。また、その才能を持った人」であり、「異才」も「人並みにすぐれた才能。また、それをもつ人」とある。

ここで言葉の意味の変化に思いが及んだ。例えば、「差別（差別的、差別化など）」がそうである。もうすでに「不当に低く扱ったり、見下したりする行為」を指す言葉になっているが、調べてみると、古い言葉で、以前には広い意味で使われ、このよくない意味での使用は明確でなかった。「差別」の後で「区別」や「個性」「多様」「特色」などの言葉が生まれ、多様化されるにつれて、厳重に的確に区別することが進んだのではなかろうか。また、時代を経るにしたがって、意味が真逆へ変化した言葉も少なくない。

そう考えると、「畸形兒」の比喩は悪い意味で使われたとは言い切れない。「他とは異なる（珍しく）優れた点がある」との意味を込めて使われた可能性もありそうだとの思いもしてきた。

加茂が表現した「奇彩を放てる」は、「異彩を放つ」の意味で使われたように思われる。前に照会した大阪教育大附属図書館からの回答で、「『結論』に、理由や由縁として挙げられるような文章の明記はなし」ともあった。

いよいよ、論文自体を読んでみないとはっきりしない、ぜひ論文全文のコピーを入手したいものだ、との思いが強く募った。

＜7＞

所蔵が確認できている２か所の図書館のうち、複写依頼の可能性は「大阪府立中之島図書館」のほうが高い。北海道立図書館も札幌市図書館も、実現性の高いこの方法を勧めてくれている。だが、最初の１回分が欠けていて、不揃いである。それに、保管資料の状態もあまりよくなく、そのコピーも不鮮明でありそうな予感がする。

やはり、本命の「大阪教育大附属図書館」所蔵資料の論文コピーの入手策をあくまでも考えるべきだ。そう強く感じた。第一候補の「IRDB」の直接利用に立ち返って実現方法を考えてみることにした。

特別なデータベースなのであるから、利用者の大半は限られた人、つまり大学や研究所などの研究者や学究に励む学生、特認研究者ではなかろうか。少額なのに面倒な手続きを伴うことや、入手に要する待機が長期に及ぶことなどは、まったく実用的ではない。些細なことに気を使い、頭を使っているようでは、世界や時代の流れに置いて行かれる。

情報化時代、ほとんどがオンラインのデータ伝送で済むように極めて合理的にことが運ぶシステムになっているに違いない。なにかにつけて遅れた地域図書館とは天と地との差が生じているかもしれない。きっとそうに違いない。各地に多数存在し、システムの近代化の遅れている地域図書館をむしろ含めず、相手にしない方途を選び、閉鎖性の高い世界を構築しているに違いない。素人判断でそう思った。

ただ、大学と言っても数が多い。地域図書館並みの大学付属図書館もあるに違いない。また、これまでの限られた体験から考えると、いくら地域に開かれた大学と言えても、そう簡単に融通性の高い利用者として登録されるとは思えない。柔軟に便宜を図ってくれるとも思えない。家のすぐそばにも大学はある。しかし、できて間もない小規模私立大学である。ここも頼りにするのは、やはり遠回りになりそうだ。

スポット的利用には、あらゆる点で最先端をいく大規模大学に絞り、依頼しやすい正規な図書館利用登録者に頼んでみるのが、容易で確実性は高いのではなかろうか。

そう思い付いて、知り合いの某大学の正規利用登録者に打診して、文献事項を記したメモを渡し、その登録者名で付属図書館経由のコピー入手依頼を申し込んでもらうことにした。

知り合いの知人は快く引き受けてくれた。すぐに手続きをしてくれて、しかも複写料は少数枚数で低料金なので送金不要とのメール連絡を受けた。

郵送に時間を要したのか、順番待ちだったのかわからないが、とにかく１週間後には、全５枚のコピーがメールに添付されて届いた。いったん、図書館から５枚（左右２ページもののコピー）の印刷物で受け取ったものを、その登録者がパソコンに取り込んで送信してくれたらしい。あまりにも迅速な対応に、私はあっけにとられた。

今までの地域図書館の対応を考えると、やはり天と地の差を感じた。夢を見ているようで、感激の感謝、感謝であった。

これまで地域の図書館を相手に、時間をかけて、ああだこうだとやり取りをし、結局は入手の困難性を感じ、断念していたものが、いとも簡単に、しかも低料金で提供されたとの話には仰天した。

やはり現代の図書館間には、大きな格差が生じていた。小規模市や町村立となると、図書館・資料室の旧体制ぶりはなおさらであろう。

100年以上前の元々不揃い・不鮮明な活字の印刷物の複写であるので、ゴミ跡やかすれ、欠字、不鮮明さがあって、読みづらさは当然予想されたことであるが、拡大してもあまりボケることなく、推理を働かせるとほとんど読み取れるものであった。

文献の複写依頼には料金の支払いが伴うのは当然としても、わずかな金額の場合も多く、業務の煩雑さと時間と人手に伴う必要経費は、何倍もの赤字を伴うのではなかろうか。仕事も雑務で遅々として進まない。お互いに発生する余分な事務と考えれば、個々の図書館が予算化して必要経費に組み込み、些細な雑務は合理化したり、廃止したりしてしまえばいい。どれだけ効率化を図れることか。

わかっていても、古い規則に縛られる地域が運営する図書館では容易にこの仕組みが変わらない。結局、経費の赤字と繁忙さを避けるには、顕著な成果として評価されない住民サービスを避け、蔵書の番人に撤することなのだろう。利用頻度の少ない貴重本は抱え込んで、図書館に足を運べる人にしか閲覧させない仕組みを作ってしまう。

地域図書館活用の後退は目に見えてどんどん進む。大都市の場合も例外でないかもしれない。バーコードを操る単純労務に特化され、専門の司書は少人数になり、定年間際の人やボランティアが窓口対応をすることで用が足りる場所となってしまっているに違いない。

地域図書館は、高額化する新刊図書や雑誌の購入・貸出の場、新聞の閲覧所として、大衆化を一層目指すのかもしれない。

図書館現状の体験談や批評はこれぐらいにしておこう。

＜8＞

本題の札幌農科大學學生と称する加茂正次による文献「教育界の畸形兒遠友夜學校」の構成・内容に立ち入ることにしよう。（著者・白佐注：わかりやすくするために、文語調を口語調に、固有名詞以外は旧字体を新字体に変えた。仮名遣いも同様にした。誤字等も気づいたものは修正し、平易な表現に翻訳した部分もある。私の力量不足による不完全さはお許しを願いたい）

論文構成は、３つに大別され、見出しは順に「１．序言、２．本旨、３．結論」とある。

「２．本旨」だけは見出しが細分化されている。項目構成は次のようになっている。

「(1)校名、(2)位置、(3)目的、(4)沿革、(5)校長及び教師、(6)現在の生徒、(7)教育法、(8)模範とする人物、(9)授業法、(10)会合、(11)年中行事、(12)維持法、(13)校歌、(14)奨学賜金、(15)将来に対する希望」。

さらに、項目(7) (10) (11)は、いくつかの小項目に分けられ、説明が加えられている。

なお、便宜上３分割された掲載誌『教材研究』（教材研究會発行、寶文館発売）との対応関係は、次のとおりである。

A. 1915年（大正４年）12月１日発行、第13巻第12號、p.64～66……「１．序言」、「２本旨」の「(1)校名～(7)教育法」。

B. 1916年（大正５年）１月１日発行、第14巻第１號、p.61～63……

「２．本旨」の「(8)模範人物～(11)年中行事」。
C. 1916年（大正５年）２月１日発行、第14巻第２號、p.66～67……
「２．本旨」の「(12)維持法～(15)將來に対する希望」と「３．結論」。

これらを見れば想像が付くように、文面の多くが、広く簡明にではあるが、「遠友夜學校」の学校紹介にあてられている。

＜9＞

執筆者の加茂正次は、「１．序言」の中で、大要、次のように述べている。

冒頭、大阪府民に読まれることを意識して、「生まれ育ち、約10年間いた大阪を離れ、ここ札幌の地で就学中の身であるが、学業を重ね深めるにつれて、学業の根本を築いてもらった大阪の地へ、また、御指導をいただいた諸先生へ、かつての学びの喜びと感謝を思い、御恩に報いたいものと常々考えている」という趣旨の言葉から書き進めている。

当札幌には、遠友夜學校という特殊な学校があって、毎夜、貧民の子弟を集め、尋常小学校教育を授けている。私は少々考えるところがあって、学校の余暇（課外の時間）を、菲才（才能がないこと）をも顧みず、２年ほどこの学校の教鞭にあてている。この学校の独特な校風と教育に接して、奇異の念に堪えず（不思議な思いを抱き）、１稿を草して（１文を書き）広く大阪の各界に伝えたいと思う。

過日、実父・仁八は（大阪から）東北地方の教育視察に来た際、その途中でわざわざ札幌の私の所を訪れた。その時、私が遠友夜學校に父を

案内して批判（批評）を聞いたところ、父は、私に教師としての注意を与えてくれただけで、夜學校については一言も語らなかった。

父の態度を私は、このような特殊な学校についての批評は、個人（経験の浅い者）が行うべきものではなく、いろいろと実際に経験を重ねた人々に仰ぐべきだ、と受けとめた。

そこで思い切って決心し、この１稿を綴ってみた。特に大阪の教育雑誌上で公にした理由は、前に述べたように、私と大阪との関係が決して浅くなく、もし（この紹介が大阪の教育界のために）少しでも研究価値があるならば、私の喜びはこれに優るものがないと思うからである。

（そして「序言」の最後に、「題して、「教育界の畸形兒」とせしは何の故ぞ。乞ふ、奇彩を放てる本校の有様を通讀せられむことを。」が書かれている）

現代語に直すと、「論文題名を『教育界の奇形児』としたのはなぜか。お願いしたい。異彩を放つ遠友夜學校の（次記の）概況を通読されることを」となろうか。

<10>

以上の「１．序言」の中で注目される１つは、父親についての記述である。

この記述で、加茂正次の父は名を「加茂仁八」と言い、大阪府の教育界ではかなりの著名人で、名の知れた人物であろうとの見当が付く。

調べてみた。その結果、教育雑誌などの随所で紹介されていた。

加茂仁八は、1859（安政６）年生まれで、かつて大阪市９連合區會

議員學務委員日吉教育會長を務めていたことがわかった。詳細な記述の紹介としては、次の文献が見つかった。相当のページを割いて紹介されている。

大浦倉之助（大阪府天王寺師範學校教諭）著、記事「熱誠なる學務委員加茂仁八氏（上）」雑誌『教育界』第11巻第２號、p.75～80、1911年12月、明治教育社（東京）発行。

「同（下）」は同第11巻第４號、p.80～86、1912年２月、同社（東京）発行。

大浦によると、加茂仁八は、当時52歳に達し、大役は後進に譲り、まだ大阪市西區日吉尋常小學校學務委員を務め、研究熱心な家庭教育家、社會教育家として活躍している評判の高い人だという。學歴・職歴などは書かれていなかったが、かつての活躍ぶりが詳しく記され、以前から著名人であったことは間違いない。人物・人格について、記事タイトルの「熱誠」の意味する「熱く燃えるような誠意。ひたむきな真心（まごころ）」の人であると、延々と述べられている。

仁八には３子があり、いずれも秀才で、長男は東京帝大に、二男（正次）は東北帝大に学び、末子の長女も名門私学に学ぶ才女と紹介されていた。長女は『紳士録』に登場する著名人に嫁いだらしい。

これらの事柄が前提にあって、教育雑誌『教材研究』に投稿した予科学生・加茂正次の論文が（採択され、添削を経て、間違った肩書で）掲載されたのではないか、との（私・白佐の）推理も一笑に付す程度ではないと思われる。

<11>

「２．本旨」を読み進め、遠友夜學校の「奇彩」ぶりを確認したい。

遠友夜學校の詳細記事を紹介するに当たって、執筆者から読者に注意（要望）があり、「遠友夜學校を外観的に観察するのではなく、むしろその内面的精神を研究してほしい」とあった。

この部分は、大正時代初期の遠友夜學校の様子を学生教師が自ら紹介した希少な資料であるので、できるだけ忠実に、丁寧に紹介したい。

ただし、これは著者・白佐による現代語訳である。わかりやすくするために、意訳の部分や用語を現代語に置き換えたものも少なくない。そのままの語を用い、括弧書きで補足した場合もある。

この学校は、その独特な教育法の神髄（本質）において、他校と類を異にする。

（1）校名……「私立遠友夜學校」という。「遠友」の２文字は論語の冒頭句から引いたものであることは論をまたない。来る者は、男女、年齢、職業、身分の如何を問わず、歓迎する。四海同胞主義（世界中の人は皆兄弟）であることを意味する。

（2）位置……札幌區南四條東三丁目。渺茫（びょうぼう）とした石狩平原を限りなく流れる豊平川の辺り、南に厳然とそびえる藻岩山を望み、北は連なる数万町歩の大沃野。約千坪の學校の敷地は広大ではないが、中に培われる若木こそ、崇高な理想と際限ない野心（志）とを懐いて、春は校庭の梨花の香りを慕い、夏はポプラの緑を吸って、秋は散り敷く蔦葛（つたかずら）の紅

い葉に心を染め、冬は一面が真っ白な白雪に清い汚れのない行いを養う。前途有望な男女が学ぶ。

（3）目的……本校は、昼間、尋常小学校において教育を受けることができない、下級社会の子女及び労働者を集めて、夜間、徳育を基本とする普通教育を授け、彼等を「人格ある人」にし、後日社会に出た時に真に「人」として社会や人類のために働き、意味（意義）ある人生を送らせることを目的とする。

（4）沿革……明治22年（明治27年、1894年が正しい）、農学博士・法学博士の新渡戸稲造氏が初めて本校を設立されてからここ20有余年、長い年月の間、何の故障（問題）もなく、日進月歩の勢いをもって盛んになり今に至った。札幌及びその付近の多くの青年子女に徳育を授けてきた。卒業生並びに中途退学者（校外生という）の数は実に数百名の多数に達し、札幌區の風紀（治安？）上に多大な貢献をしたと信ずる。

（5）校長及び教師……新渡戸氏は今も校長である。開校以来、常に札幌農科大學（前札幌農學校、現東北帝國大學農科大學が正しい）の学生中で本校に興味のある者が献身的に教鞭をとった。昼間は大学で授業を受け、夜間の余暇を授業にあてた。現在の農科大學教授である農學博士・大島金太郎氏、理學博士・宮部金吾氏、農學博士・半澤洵氏、農學博士・須田金之助氏、農學士・森本厚吉氏等は、いずれも学生時代に本校で教鞭をとられたのである。

（6）現在の生徒……現在は、男女合わせて170余人の生徒を教育している（毎日通学できている実人数は大幅に少ない）。20歳を超えた者が10数人いる。男子の多くは、職工、給仕、小僧、労働者等であり、女子の多くは、昼間は家事の手助けをしている者である。

（7）教育法……本校の目的は第一に徳育にある。尋常小学校普通教育

を授けるのは、ただその手段だけである。下級社会の子女に、人格がいかに尊いものであるかを認知（理解）させることを期する。

◎人格教育……あくまでも人格の尊さを教える。自己及び他人の人格を絶対に尊重し、これを傷つけたり、傷つけられたりするのは、「人」として最大の侮辱であることを生徒にはっきりわからせるよう努める。同時に、宇宙にはなお人間以外にも完全な人格者がいることを教え、生徒の心の中に、謙虚な服従心と希望ある向上心とを起こさせ、「善」に対しては鋭敏な感覚を養わせ、「美」に対しては高尚な憧憬の念を抱かせ、「真」に対しては判断ある追究をなさせ、真善美相まって円満な人格をつくらせようとする。

◎宗教教育……キリスト教でもない、仏教でもない、儒教でもない、その他どんな宗教でもないといえども、児童の心中に、人間以上の絶対の力があること、言い換えれば、絶対無限唯一である大能者を信じて、常に続けてこの人世（世の中）を楽しく愉快に送り、希望と信仰と愛心（慈愛）を抱いて、世の光となって、世界文明の水平線を少しずつでも高くするよう努める。

◎自然教育……どんな生徒であっても、一個の「人」として尊重し、尊重され、その個性が向かうままに発達させる。本校の精神に反しない限りは、どんな個性を有する生徒であっても、それを曲げて同じ型のものにすることを求めず、天才は向かうとおりに天才であるようにさせる。多くの平凡者を作る普通教育ではなく、１人でもいいから超俗な非凡人を作る天才教育である。したがって、生徒にはどんな干渉もしないで、思うようにさせて、放任主義を極端にまで発揮させる。生徒もまた常に、自由を尊び、平等を唱え、独立独行を喜び、自然を愛する。

◎情愛教育……教師と生徒の関係は「きょうだい」であると教える。そ

のうちに親身によって増える愛があって、情愛に溢れるところ、常に涙あり血ある逸話に富むようになる。生徒の多くは貧民の子弟である。教師は大学に学び、学問を修める者。両者を結ぶのはただ愛であり、なんと麗しいことではないか。生徒は毎日毎夜、教師の寄宿あるいは下宿を訪ねて、交わりの温かいこと、実のきょうだい以上である。教室においても、温和な情愛がいっぱいに満ちている。

このような教育をしているため、生徒は一種独特な「夜学校タイプ」を作り、社会に出た後に至っても、その美しい習慣を失うことなく社会の信用を得て、人格円満な個人として地位を築きつつある。

特に、本校の特色としているところは、生徒に対してどんな懲罰をも加えないことである。彼らも人である以上、種々の罪を犯すことがあるけれども、教師はこれを罰せず、ただその悔い改めに向かって努力する。どんな手段と愛とをもってしても悔い改めないときは、ただ彼らの人格を信頼して、人格の目覚めを待つだけである。しかしながら、１年あるいは２年ほど夜学校の教育を受けた者は、決して嘘を言うことがなく、その一言一行はすべて信頼することが十分にできるほど正直である。われわれはいつもこれを喜んでいる。

故に、教師は決して懲罰を加えない。体罰などはわれわれの夢にも浮かばないことである。われら人間には同じ人間を審判する権利はない。

（8）模範とする人物……本校では、アブラハム・リンカーンを模範の人物として推奨し、リンカーンの肖像を各教室内に掲げて、日夜、生徒らにその人格を学ばせている。リンカーンは、貧しく身分が低い身であったが、大統領にまで出世した。われらは、リンカーンの出世が希有であることに感激すると同時に、むしろ彼の崇高な人格と円満な識見とを称賛し、彼が世界人類のために尽くした事業、ことに奴隷解放をして

四海同胞を称え、不自然な階級制度を打破し、自由・平等・博愛の主義主張を鮮明にしたことを喜ぶ。とりわけ、彼がその一生をとおして常に敬虔な態度を維持して、自己のために働くのではなく、社会・人類・宇宙の進歩のために献身的な努力をしたのは、われらの最も模範とするところである。

（9）授業法……本校では毎日、午後６時から８時半まで（夏季は７時から９時半まで）学業を授ける。日曜日を除く以外の日は寒暑雨雷のいかんを問わず、休日を設けず、夏季休暇は全然なし、毎日曜ごとに別項に記すように会合を行う。２学年を１教室とし、現在４教室がある。本校では、尋常小学１年から高等小学２年までの教育を授け、学科目は、読書・算術・習字・作文・地歴・理科から唱歌・手工に至るまで各学科を設けている（ただし、修身と体操の科目はない）。

修身の科目を設けないのは、本校の目的は「徳育」にあって、毎時間の授業中で既に修身に必要な各般の注意を与えており、特に別記で示すような会合を設けて、毎日曜日を有益に使用しているからである。体操の科目がないのは、１つは夜間教育で難しく、特に設けないのは授業前約１時間（午後５時から６時まで）運動場において盛んに運動をするよう奨励し、教師と生徒が混じって、ベースボール、フットボール、器械体操、相撲、クリケットを行い、夏季は特に水泳部を設け、盛んに水泳を行うからである。本校の誇りとするのはベースボール部で、毎日これを行わない日はない。札幌のこの分野では盛んなことで名高い。なお、本校においては、毎月１回は遠足を行なって、生徒の体育を補っている。（別項に記載）

（10）会合……毎日曜日必ず会合を開く。その都度、大学の諸教授又は市内の名士・教育家・宗教家を招いて、修身・処世上の講話を頼み、

あるいは12人の教師はその学んでいる専門学科について通俗（普通の）講演をするのを通常とする。会合は次の３つに分ける。

◎リンカーン会……尋常小学５年以上の男子生徒を中心として、卒業生及び教師も会員とする。月に２回（第２、第４日曜日）会合を開く。会員数人の演説、教師の講演、来賓の訓話を行なったあと、教師・生徒が一緒になって、活発な討論会を開くのが常である。討論会では、議論百出、舌戦を繰り広げ、夜12時に及ぶこともあり、本会の特色となっている。年に２回、生気に満ちた大会を開く。本年で重ねた開催回数は400回に及ぶ。

◎菫（すみれ）会……尋常小学５年以上の女子生徒を中心として、卒業生及び教師も会員とする。リンカーン会と異なるのは、月に１回（第１日曜日）開催とする。討論会の代わりに仕事会を設けて、各種の仕事を行い、その賃金を会の拡張費にあてる。回数２百回に達する。年に２回大会を開く。

◎修身会……尋常小学４年以下の男女生徒と教師とで組織し、月に１回又は２回（第３、第５日曜日）に開く。会の終了後、教師・生徒が一緒になって、各種の遊戯（遊びごと）を行い、茶菓を食し、愉快に楽しく１夜を送ることを通常とする。

　これらのほか、「月次会」と称して教師同士の懇親会を毎月１回開く。「感謝会」と称して、時々卒業生及び校外生の教師を招待する会がある。子弟間の人情の厚いこと、玉のように美しい。また、卒業生間には、「白樺会」「小羊会」などのような小会合もあって、時々、親睦会も開かれる。

（11）年中行事……本校では、大祭日（国や皇室が主催する祭典）、祝日、記念日以外に次の行事があって、親睦を図ったり、生徒を高尚な趣

味の生活を送らせたりしようとする。

◎入学式（４月）……新旧生徒・教師が顔合わせをする。毎年４月には３分の１の新入生を迎える。

◎大運動会（５月）……毎年５月には、農科大学で大運動会がある。その次の日に、本校で、大学で使用した各運動具、装飾その他一切のものを借りてきて、小学校としては稀に見る盛大な競技会が行われる。

◎尚武節句（５月）……手工科で作った人形・武器等を飾って、五月夜（さよ）に、上級生も下級生も集まって節句を祝う。

◎桜狩り（５月）……５月中旬過ぎに、山野に美しく豊かに咲き乱れる桜を訪ねて、１日の風流な遊びをする。

◎リリイ摘み（６月）……６月上旬、生徒一同でリリイ摘みを催す。リリイ（谷間の姫百合、別名は姫影草）は北海道の特産で、放つよい香りが有名である。

◎植物園訪問（６月）……青葉若葉で飾られる植物園（農科大学付属）を訪ねて、カーペットのような芝生の上で１日を過ごす。

◎川狩り（７月）……河川に行って、魚や貝を取る。女児は炊事を担当し励む。

◎蛍狩り（７月）……時々、ホタル狩りを行う。

◎夜行遠足（８月）……男子生徒一同を引率して、夜10時ごろから夜行を約７里（28キロ）の山道を踏破して、翌朝に海岸に着き、１日海水浴を行う。

◎学芸大会（８月）……８月中旬に行う。

◎水泳大会（８月）……８月は毎日水泳を行うが、８月下旬大会を行う。兼ねて相撲会も開く。

◎月見会（９月）……名月の日を選んで、郊外で月を鑑賞し、一同は豆

を食べる。１夜を楽しく過ごす。

◎藻岩山登山（９月）……９月下旬、秋の景色が鮮やかな藻岩山に登る。

◎温泉宿泊旅行（10月）……札幌から８里（32キロ）の山奥に定山渓と称する温泉がある。紅葉で有名である。在校生・卒業生一同で宿泊旅行を行う。

◎牧場見学（10月）……札幌付近には、月寒牧場、真駒内牧場があり、土地は広大である。１日見学を行う。

◎石狩旅行（11月）……石狩川の鮭漁を見学する。

◎記念会（11月）……11月中旬、記念会を行い、往時をしのび、「黄泉の客」となった教師等を追悼する。

◎奨励会（12月）……12月下旬、盛大な奨励会を開き、教師・生徒・卒業生等が、劇、芝居、その他を行う。数週間の準備を要するのが通常である。

◎新年会（１月）……１月１日は卒業生・在校生一同のために、１月３日は在校生男子生徒のために、１月５日は在校生女子生徒のために、それぞれ行う。

◎雪戦会（２月）……雪は北海道の花である。校外に出て、一同で雪戦会を行う。

◎豚汁会（２月）……学校の屋上の雪落としに名を借りて、教師・生徒一同が食事（豚汁）を共にする。

◎雛祭り（３月）……手工科で作った紙雛を飾って女子生徒一同が雛祭りを行う。

◎別離会（３月）……卒業式後、別離会を開いて、各自が感想を述べる。いずれも、涙々である。在校中の恩義と情愛を回顧し、１年に１度の悲哀を感じる会合である。

これらのほか、各教師は時々その受持ち生徒を率いて、郊外あるいは自分の私宅に招き、親睦を図っている。

（12）維持法……札幌農科大學（東北帝國大學農科大學が正しい）諸教授と札幌區民有志の毎月の定額寄付金で維持する。各位の同情は、下級社会の子弟にとって、天来の福音である。

（13）校歌……本校には、本校独特な校風と思想とを表現する校歌があるが、あまりにも長いのでここでは省略する。次に「奨励の歌」と称する唱歌を紹介する。

＜奨励の歌＞（歌詞は原文のまま）

1．日毎止まず、業を勵み、夜毎うまず教聞かば、望多き、行手なるよ、うれし我等、幸は待てり。

2．月に雪に、心恥ぢず、常に人の、道を踏まば、遠き友も、やがて來る、たのし我等、獨りならず。

3．繩のとぼそ、朽ちし軒端、清き月は、さやに照らす、つづれ着るも、心澄まば、たのし我等、うれしたのし。

（14）奨学賜金……本校へ毎年内務省から奨学賜金として２百円、北海道庁から百円程度の賜金がある。本校維持上、感謝に耐えない次第である。

（15）将来に対する希望……現在はただ下層社会の子弟子女の教育だけをしているが、将来はなお進んで、昼間彼らに相当な職を授け、その生活手段の途を開き、長くその職に就き続けられるように、学校に一種の職業会社を組織したいと希望している。しかし、資本金がないためと、教師は昼間学務が複雑多岐にわたるために、その運びには至っていない。だが、近い将来において成し遂げたい。

以上、長文に及んだが、中心になる「２．本旨」を紹介した。

どこを取り上げても、よくない（非難めいていう）意味での奇異性（奇形児）をうかがわせる点は認められない。

日曜日や学期間の休暇日を利用していたのであろう。昼間の学校と間違うほど昼間の行事もいろいろと催していた。もし、昼間に行われる行事が多いことなどやリンカーンを模範とすることなどをもって、「奇形」とする理由なのであれば、必ずしも否定はできないかもしれない。一方、貴重な存在の「特色」ある優れた学校である点からは、多くの人の称賛の賛同を得たであろう。この評価は、今までも、これからも変わりないと思われる。

<12>

最後の「３．結論」の部分の記述を以下に示す。

社会政策といえばそれは国家社会の中心問題であり、その政策を適宜に使用するか否かは、国家の経済界・金融界に及ぼす影響は多大であり、ひいては道徳の興廃、倫理の根源に影響を及ぼし、一国の隆盛と衰亡とは第一にこの社会政策のいかんによる。

社会政策を労働問題と貧民救済問題とに分けて考える。ことに本国のような階級制度が著しい国において、かつ、年々下級階層の人が増加している国においては、貧民救済は実に危難が迫る問題であって、為政者は１日もおろそかにしてはならない重大問題である。

貧民を救済するにあたって、金銭物品を給与して一時凌ぎに上辺だ

けを取り繕うことは、政策としては最も幼稚な方法である。これは貧民を救済するのではなく、かえって貧民をさらに貧乏の深みに誘導するものである。

われらは、彼らにほどよい教育を授け、人格を築き、職業を与えて、「人」としての処世法を示さなければならない。これが万全の策であり、国家の急務である。

それなのに、現今の日本においては、貧民教育を授けている設備はどうだろう。いや、むしろ日本に一定の社会政策があるか否かを、われわれは疑う者である。

聞くところによると、英国は世界中で最も社会政策が進歩した国であって、その結果、英国人は誇りをもって言う。「英国人はすべてジェントルマン（紳士）である」と。私は、現在の日本人のどのような１人取り上げても、「人格ある人」であると言えないのを悲しみ、英国人の高言壮語（自分では実現できそうにない大げさなことを言うこと）に対して大いにうらやましく思うのである。

幸いにして、わが遠友夜學校は日本北門の下流社会のために全力をあげて働き、些細ではあるが、この愛する国家のために貢献しようと努め、ひいては世界人類の文明の水平線を、ごくわずかずつでも高めつつあることを誇りに思え、喜んでいる。

しかしながら、その方法において少なからず欠点があると思い、広くこの分野で経験のある賢人の御批評を乞いたまわり、目的をやり遂げたい。

思うに、大阪市のような大都市にあっては。ことに貧富の差が大きく、貧民子弟は少なくないと思う。特に南區には貧民小学校が２校あったと覚えている。しかしながら、100校にも及ぶ市内各小学校においては、

貧民子弟を教育し徳化し、体格を改良し、言語を改善し、人格ある人にするために、どんな方法・手段を講じられつつあるか。

保育問題も、小学校建築問題も、教員待遇問題もそうである。これらみんな教育の大きな要である。そうではあるけれども、われわれは、さらに進めて下流社会の教育に多大な注意を払われるよう乞い願う次第である。

なぜならば、国家にひとたび緊急事態が生じた場合は、身を粉にして働くのは少数の上流社会の人ではなく、全く中流以下、それよりも下流の多数民である。

なお、人類の目的である進化とは、上層に位する少数民の文明進歩を意味するのではなく、人類の下層を形成する社会が進歩して初めて向上することである。もし少数の上流の少数人だけが向上し、下層社会が下落するのなら、それは文明の進化ではなく、文明と野蛮との差を益々著しくするものである。貧民教育の大事なことは実にここにある。

以上に記した遠友夜學校の記録の一端が、たとえ太平洋の中に投げられた１個の石ころが起こす波紋ほどでもよいから、わが国の教育界に刺激を与え得れば、投稿者の幸せこれ以上のものはない。

私にとって、恩恵深大な大阪市の教育界の皆様、お願いですから、私の意図を斟酌していただき、若輩の意見にも耳を傾けてください。傲慢無礼の言葉、年長者に対するご無礼の言葉が非常に多かったことを心から恐縮いたしております。身を低くして筆を置きます。

この論文が「遠友夜學校」の教育を例に、貧民教育の意義と重要性を説いたものであることは明確で、これ以上の補足を必要としないであろう。

<13>

経緯を振り返ってみると、私・白佐は、論文のタイトルに注目して、手間暇をかけてやっと現物のコピーを入手した。

前述の論文内容からは、論文のタイトル「教育界の畸形兒遠友夜學校」から予想された、差別的意味での「奇形児」ぶりを象徴して示す記述を私は見つけられなかった。むしろ、普通の昼間尋常小学校を超えるような豊かな配慮が細かく行き届いていたことを知って驚いた。

おそらく２度と再現できないような、愛情豊かな親友同士の理想郷が築かれていた。この「異彩」を「異形児」と言い、「奇彩」と表現するのなら、それもありなのであろう。いや、タイトルを誤解した私は、想像力の不足を恥じ入らなければならないかもしれない。

普通の記述で強調される遠友夜學校の特徴は、年齢・性別・身分等一切不問、授業料等の納入金は皆無、逆に学用品等は支給、昼間働きながら夜に勉強、入学・休学・退学も出席・欠席・遅刻・早退も自由、男女共学、男女区別はあっても差別はない。

教える先生は帝國大學の教授等や学生の他に一流の名士も加わる。指導陣はみなボランティア。憧れの人が教師であり、友達でもある。時には、膝を突き合わせて、「和」について対等に話し合う。

生徒は学校に近づくと、自然と走り出してしまうという。この気持ちはよくわかる。魅かれるわくわく感が抑えきれなくなるからだ。眼はキラキラ、空の星のように。貧困の惨めさが吹っ飛んでしまい、幸せの喜びにスイッチが無意識に切り替わる一瞬でもある。

このあたりを強調もせず、強く意識もせず、一体感が喜びを、微笑み

を、笑いを引き出し、高揚感が満ちてくる。そこを、みんなが自然体でさらりと振舞っている。

昼間の普通の尋常小学校を補うために開設される夜間学校の暗いイメージをぬぐい去り、むしろそれを逆転して見せ、活気に満ちた生き生きとした明るい姿の学校であることが示された。

学校の経営・運営は大規模なボランティア精神を結集し、並々ならぬ工夫と協力と犠牲のもとに維持されてきた。かつて日本のどこでも実現されなかった理想教育の試みだった。無意識のスイッチの切り替わりは、経営・運営に携わる学生教師にとっても同じだったに違いない。

<14>

（くどくなるが、少し視点を変えて、同じ話を繰り返してみる）

それだけに、なぜ「教育界の畸形兒」と形容して「遠友夜學校」を紹介するタイトルにしたのか。専門職にある読者への呼び掛け・紹介である論述に、その理由を明かしていない。このことに、少なからず疑問が残る。皮肉か、注目を引く奇抜さをねらったのか。読後感に意外性や驚嘆を感じてもらおうとしたのか。いろいろと想像してみても、私にはやはり納得のいく答えは見いだせていない。

執筆者の「所属・肩書」が「札幌農科大學」という実在しない大学の学生であったことに、救いと安堵の気持ちをもった。タイトルは、執筆者本人以外の人が何か含みを持たせて付けたと判断されるのである。執筆した当人自身が、戸惑いのタイトルであったに違いない、と思うことで救いとしたい。

加茂がこの論文を書いたのは予科の３年生の時。教師経験は２年とあったから、予科の１・２年時の、初めての実際体験に基づいて得た見識だったのであろう。

それにしても、この論述の「３．結論」は、いささか飛躍してしまった感があるようにも思われる。紙面の関係で論の途中を省き、端折ったのかもしれない。

しかし、究極の結論は結局そこへ行き着くことにはなるだろうから、この論文の結論と言うよりも、加茂が２年間の体験から自ら得た教育論だったのであろう。ぜひ訴えたかったのであろう。そう見れば、率直に持論を述べたとも言えるだろう。

学生教師は、現在の日本の教育制度に当てはめれば、高校生や大学の教養時代に相当する。それを考えれば、なかなかやり通せない体験をして得た、優れた見識であり、大胆に踏み込んだ理屈である。

もし、本人が考えて付けたタイトルであったとすると、奇抜なものでありすぎたのではないか。優れて「異彩を放つ」意味を込めたとすれば、実情を知った時点で読者は、かえって気負いに興ざめしてしまうかもしれない。もっとも、百年を経ても、私のような読者もいるから、タイトルはやはりそれなりに効果的であったのであろう。

ただし、加茂も、遠友夜學校を語るとき、理想の夢や希望に燃えて熱っぽくなり、スイッチが切り替わったと考えれば、理想郷を想い、理想論を語っても不思議ではない。現実に、百年経っても大きく変化したとは言い切れないのだから。考えようによっては、いくら飛躍・強調しても、飛躍・強調し過ぎたとは言えないとも思えるだろう。百年以上も前に、あるべき姿の理想を20歳前後にして遺したのだから、流行語で表現して失礼ながら「あっぱれ！」が評価としてふさわしい。

<15>

執筆者・加茂正次については、旧制の大阪市立市岡中學５年在学時（東北帝國大學農科大學豫科に進学する前年）の1912（大正元）年12月15日にキリスト教会で受洗していたことがわかっている（日本聖公会東京聖テモテ教会編発行『弥生が丘の教会70年の歩み』昭和48年７月１日発行の記事、及びその他の文献による）

加茂の消息は、すでに紹介した「北海道帝國大學農學部」を卒業したその年の秋に「東京帝國大學法學部」に進学したのを最後に、以降の経歴は追跡・把握できていない。手掛かりとなる後の情報をまだ見付け得ていないからである。

できることなら、私は、遠友夜學校での教師経験が加茂正次のその後の人生にどう活かされ、自身が描いた夢や願いを成就しようとどう努力したのかを確かめたかった。多分、直後の農学部の研究においても、その後に新たに法律学の道に進んだ志の源にも、教師経験が影響を及ぼしたものと思われる。

この意味では、この加茂の「遠友夜學校紹介」は、新渡戸稲造の夢を未来につなげる伝承活動の、とあるひと固まりを実際に示し、さらに未来につながっていく連鎖の一瞬を提供してくれたのであろう。

また、加茂の遺したこの資料論文に対するその後の反響・成果等についての情報は、まだ１つも確認できていない。未調査の課題が１つ増えた。探究を続け、後継者に引き継ぎたい。

<16>

様々な立場の人々のご協力の下、この小文をまとめ得た。ご迷惑にはお詫びを申し上げ、特段のご配意・ご好意・ご協力には心より感謝を申し上げたい。

特に、下記の図書館のレファレンスサービスのご担当の方々には、何度もお手数をおかけし、ご親切なご助言・ご回答をいただいた。重ねて御礼を申し上げる。

◎北海道立図書館

◎札幌市中央図書館

◎大阪大学附属図書館

◎大阪府立中之島図書館

なお、拙著『遠友夜学校の遺産はどう伝承されたか―新渡戸稲造の夢を未来へつなぐ年譜―』の「３訂版」を発行する際には、加茂正次の論文紹介項目の修正と、この著作の存在を追加したいと考えている。

また、加茂正次論文の存在を実証する意味で、掲載論文の実物全文のコピーを「付録資料」として示した。誤植等はそのままとした。

雑誌での実際の掲載は２段組みで、ページ途中から始まり、ページの途中で終わる編集になっているため、実物提示では、縦書き本文をそのまま切り貼りして体裁を整えて載せたものである。大きさ等の不揃いをご容赦願い、ご覧いただければ幸いである。

最後に、加茂は『教育界の異彩遠友夜学校』と題したかったのではないかと想像するのである。

【付録資料】加茂正次論文の全文

教育界の畸形兒遠友夜學校

札幌農科大學學生　加茂正次

一　序言

余、學を大阪の地に受くること約十年、尚現今も此處札幌の地におりて就學日なりと雖も、學業の根本は全く大阪にて築かれし也。是れを想ふ毎にして余を今あらしめ給ひし諸先生の御鴻恩のげに廣大無邊なるを感激せざるを得ず。ことに今尚、月に日に學業の進歩するを感じ、學林の益深遠なるを測る毎に、小學時代を懷古して轉た歡喜と感謝とに耐へず。いつかは此御恩澤の萬分一をも報いまつらむ事を期す。當札幌に遠友夜學校なる特殊學校ありて毎夜貧民の子弟を集めて小學教育を授く。余いさゝか感ずる所ありて非才をも顧みず學校の餘暇此校に教鞭を取る事こゝに二年。此校の獨特なる校風と教育とに接して、奇異の念に耐へず、一稿を草して廣く斯界に公にせむ事を欲しぬ。會ま過日、家父仁八の東北地方教育視察の途次、札幌に駕を寄せ玉ふや、引いて遠友夜學校に導き批判を乞ふ。家父只教師としての注意を余に與へしのみにて、夜學校につきては一言をも語らず。思ふに是れ、かゝる特殊なる校の批判は、個人の爲すべきものに非ずして、大力諸賢の經驗ある御批評を待つべきもの也との意か、つひい意を決してこゝに一稿を綴りぬ。特に大阪の教育雜誌上に公にする故以のものは、前述の如く余と大阪との關係淺からざる故、もしいさゝかたりとも研究の假値あるを得ば、余の喜これに優るものなきを思ひてなり。

題して「教育界の畸形兒」とせしは何の故ぞ。乞ふ、奇彩を放てる本校の有樣を通讀せられむことを。

二、本　旨

遠友夜學校の記事を詳載するに當り、最初より特に諸兄の注意せられむ事を望む要點は、本校を外觀的に觀察せらるゝ事なく、寧ろ其精神を研究せられむ事なり。本校は其獨特なる教育法の眞髓に於て、他校と類を異にするなり

(1)校名　私立遠友夜學校と稱す。遠友の二字、論語學頭何より出でしは論を俟たず。來るものは、男女、年齢、職業身分の如何を問はず之を歓迎す。四海皆同胞主義也。

(2)位置　札幌區南四條東三丁目。泚茫たる石狩平原を異せしも無く流るゝ豊平河の邊り、南に藻岩山巍然として聳ゆるを望み、北は遠く數萬町歩の大原野。約千坪の敷地は大なられども、中に植はるゝ若木にこそ、崇高なる理想と際限無き野心とを懷きて、巻く、校庭の梨花の香を嗅ひ、夏はポプラの緑を吸ひて、秋、散り敷く蔦葛の紅き葉に心を染め、冬は皚々たる白雪に清操を養へる、前途有爲の子女なれ。

(3)目的　本校は、晝間、小學校に於て教育を受くる事能はざる、下級社會の子女並びに勞働者を集めて、夜間、德育を根本とせる普通教育を授け、彼等をして「人格ある人」たらしめて、後日社會に出でし時眞に「人」として、社會人類の爲に働き、意味ある人生を送らしむるを目的とす。

(4)沿革　明治二十二年、農學博士法學博士、新渡戸稻造氏、初めて本校を設立せられてよりこゝに二十有六年、長き年月の間何の故障だに無く、日進月歩の勢を以て隆盛に向ひ、今に至るも、札幌及其附近の多くの青年子女に德育を授く。本業生並びに中途退學者(校外生と稱す)の數、實に數百名の多きに達し、札幌區の風紀上に多大貢獻する所ありしを信ず。

(5)校長及教師　新渡戸氏今に至るも校長の職にあり。開校以來常に札幌農科大學(舊農學校)學生中、本校に趣味を有する者獻身的に教鞭を取る。晝間は大學にて授業をうけ、夜間の餘暇新業に當るなり。

現在の農科大學教授たる農學博士大島金太郎氏、理學博士宮部金吾氏、農學博士半澤洵氏、農學博士須田金之助氏、農學士森本厚吉氏等、いづれもその學生時代に本校にて教鞭を取られし也。

(6)現在生徒　現在は男女合せて約百七十餘人の生徒を教育せり、二十歳を越ゆるもの十數名あり。男子の多くは、職工、給仕、小商、勞働者等にして、女子の多くは雜問家事の手助をなせるもの也。

(7)教育法　本校の目的は一に德育にあり。小學普通教育を授くるは只その手段のみ。下記の社會の子女に人格のいかに尊きものなるかを知らしめむこと期す。

イ人格教育也——あくまでも人格の尊きを教へ、自己及他人の人格を絶

對に樂觀し、これを傷け或は傷けらるゝは、「人」として最大の恥辱なることを十分に生徒の腦底に明瞭ならしめむとして努力す。同時に、宇宙には尚人間以外に究竟なる人格者ある事を教へ、生徒の心中に、敬虔なる服從心と崇拜ある向上心とを起さしめ、「善」に對しては、毅然なる感覺を養はしめ、「美」に對しては高尚なる憧憬の念をいだかしめ、「眞」に對しては判斷ある道究をなさしめ、眞善美相俟つて、圓滿なる人格を作らしめむとす

ロ 宗教教育也——基督教に非ず、佛教に非ず、儒教に非ず、其他いかなる宗教にも非ずと雖も、兒童の心中に、人間以上なる絶對の力あること、換言すれば、絶對無限唯一なる大能者を信じて、常に此人世を樂しく愉快に缺けなく送り、希望と信仰と愛心とをいだきて、世の光となりて、世界文明の水平線を少しづゝなりとも高からしめむと努む。

ハ 自然教育也——いかなる生徒たりとも、一個の「人」として尊重し、その個性の赴くがまゝに發達せしむ。本校の精神に反せざる限りは、いかなる個性を有する生徒たりとも、それを曲げて同じ型のものとなすを欲せず天才をして思ふがまゝに天才たらしむるなり。多くの平凡者を作る普通教育に非ずして、一人にても可なり、超俗せる非凡人を作る天才教育也。從つて生徒にはいかなる干渉をもなさず、思ふがまゝに爲さしめて、放任主義を極端にまで發揮す。生徒も又常に、自由を尊び、平等を唱へ、獨立獨行を喜び、自然を愛せり。

ニ 情愛教育也——教師生徒の關係は兄弟なりと敎ゆ。その内に親身に堪る愛ありて、情愛の溢るゝ所、常に涙あり血ある逸話に富む。生徒は多く貧民の子弟なり、教師は大學に學を修むる者、問者を慕ふに只愛あり、豈麗しからずや。生徒は日曜夜毎教師の寄宿或は下宿を訪ひて、交の暖かなる事兄弟以上也。教室にありても、溫和なる情愛の充滿せるを見る。

かくの如き教育をなせるが爲、生徒は一種獨特なる「夜學校タイプ」を作り、社會に出でし後に至るも、その美風を失ふことなく社會の信用を得、人格圓滿なる個人として地位を進めつゝあり。

特に本校の特色とする所は、生徒に對していかなる懲罰をも加へざること之也。彼等も人たる以上種々の罪を侵すことあれども、教師は之を罰せず、只その悔い改めに向ひて努力す。いかなる手段と愛とをもつてするも、悔い改め得ざる時は、只彼等の人格に信賴して、人格の目醒むるを待つのみ。然れども一年或は二年程、夜學校の教育を受けし者は、決して虚言する事なく、その一言一行はすべて信賴するに足るほど正直なるを、吾人は常に喜べり。故に教師は決して懲罰を加へざる也。體刑の如きは吾人の夢にも浮ばざる所。我等人間には同じ人間を審判する權利なし。

(8) 模範人物　本校にては、アブラハム、リンカーンを模範人物として推奬し、リンカーンの肖像を各教室内に掲げて日夕生徒等をしてその人格を學ばしむ。リンカーンは、身賤より出でゝつひに大統領にまで出身せり、吾人はリンカーンの立身出世の稀有なるを感激すると同時に、寧ろ彼の崇高なる人格と圓滿なる識見とを賞讃し、彼が世界人類のために爲したる事業、ことに奴隷解放をなして四海同胞を唱へ、不自然なる階級制度を打破して、自由平等博愛の旗幟を鮮明になしたるを喜ぶ。就中、彼が其一生を通じて常に敬虔なる態度を維持して、自己の爲めに働くに非ずして社會人類宇宙の進歩のため、獻身的努力をなしたるは吾人の最も模範とする所なり。

(9) 授業法　本校にては毎日午後六時より八時半まで（夏季は七時より九時半まで）學業を授く、日曜日を除く以外の日は寒暑雨雪の如何を問はず毎日を設けず夏季休暇は全然なし。毎日曜日毎に別項に記すが如き會合を行ふ。二個學年を一教室とし、現在四ヶ教室あり。

本校にては尋常小學一年より高等小學二年までの教育を授け、學科目は讀書算術習字作文地歴理科より唱歌手工に至るまで各學科を設く（但し修身科と體操科とは無し）

修身科を設けざるは、本校の目的は德育にありて、毎時間の授業中に已に修身に必要なる各般の注意を與へをり、特に別項に記すが如き會合を設けて、毎日曜日を有益に使用しつゝあるが故なり。

體操科の無きは、一は夜間教育なるによると雖も、特に設けざるは、授業前約一時間(午後五時より六時迄)運動場に於て盛んに運動を奬勵し、教師生徒相混じてベースボール、フツトボール、器械體操、相撲、クリケツトをなし、夏季は特に水泳部を設けて盛んに水泳を行はしむるが故也。本校の誇りとするは、ベースボール部にして、毎日これを行はざる日無く、札幌の斯界に聲名を擅げ居れり。尙本校にては毎月一回は必ず遠足を行ひて、生徒の體育を補ひとせり(別項記載)

(10)會合　毎日曜日必ず會合を開きて、その都度大學の諸教授或は名士教育家宗教家を招きて修身處世上の講話を乞ひ、一二名の教師は、其學ぶ所の專門學科につきて、通俗講演をなすを常とす。會合を別ちて左の三とす。

(1)リンカーン會　尋常九年以上の男生を中心として　卒業生及教師も會員たり。月に二回(第二第四の日曜)開く、會員數名の演説、教師の講演、來賓の訓話ありて、教師生徒相交りて盛んなる討論會を開くを常とす。討論會には議論百出、舌戰滔々、夜十二時に及ぶことあり。本會の特色とす。年に二回盛んなる大會を開く。本年にて會數を重ねること四百有餘會に及べり。

(2)菫會　尋常五年以上の女生徒を中心として、卒業生及教師も會員たり。リンカーン會と異なる點は、月に一回(第一曜日)開催すると、討論會の代りに仕事會を設け各種の仕事を爲して、その賃金を會の擴張費に當つる事之也。會數二百會に垂んとす。年に二回大會を開く。

(3)修身會　四年以下の男女生徒と教師とをもつて組織し、月に一回乃至二回(第三日曜、第五日曜)開く。會の終了後、教師生徒相交りて、各種の遊戯を行ひ菓菓を饗し、愉快に樂しき一夜を送るを常とす。

右の外、月次會と稱して、舊新教師の懇親會を毎月一回開くと、感謝會と稱して、時々卒業生及校外生より教師を招待する會ありて、師弟間の至情の美しき事玉の如し。又卒業生間には、白樺會、小羊會等の如き小集會ありて、時々親睦會を開けり。

(11)年中行事　本校は、大祭日、祝日、記念日以外に左の行事ありて、一は親睦を計り、一は生徒をして高尙なる趣味に生活せしめむ事を期す。

(四月)

(イ)入學式　新舊生徒及教師の顔見合せをなす、毎年四月には約三分の一の新入生あり。

(五月)

(ロ)大運動會　毎年五月には農科大學に大運動會あり。その次の日に、本校にては、大學にて使用せし各運動具、裝飾其他一切のものを借り來りて、小學校としては稀に見る盛大なる競技會を行ふ。

(ハ)尙武節句　手工科にて作りし各種の人形武器等を飾りて、五日後、上級下級生集りて節句を祝ふ。

(ニ)櫻狩　山野に爛漫と咲き亂るゝ櫻を訪ひて一日の清遊を試む。月の中旬過也。

(六月)

(ホ)リリイ採み　リリイ(谷間の姫百合、一名姫影草)は北海道の特産にして芳香をもつて名あり。月の上旬、生徒一同リリイ採みを企す。

(ヘ)植物園訪問　青葉若葉にて飾られし植物園(農科大學附屬)を訪ひて、毛氈の如き芝生上に一日を送る。

(七月)

(ト)川狩　河川に赴きて、魚介を取り、女兒は炊事を司りて清遊を恣にす。

(チ)螢狩　時々螢狩を行ふ。

(八月)

(リ)夜行遠足　男生一同を引率して、夜十時頃より夜行を行ひ約七里の山道を踏破して、翌朝海岸に出で、一日海水浴を行ふ。

(ヌ)學藝大會　月の中旬に行ふ。

(ル)水泳大會　八月は毎日水泳を行へども、八月下旬その大會を行ひ、兼ねて相撲會をも開く。

(九月)

(ヲ)月見會　明月の夜を選びて、郊外に月を賞し一同豆を食して、一夜を歡樂さいもに過す。

(ワ)藻岩山登山　秋色鮮やかなる藻岩山に登るは月の下旬なり。

(十月)

(カ)温泉宿泊旅行　札幌を去る八里の山奥に、定山渓と稱する温泉あり。紅葉をもつて名あり。在校生卒業生一同、宿泊旅行を行ふ。

(ヨ)牧場見學　札幌附近に、月寒牧場、眞駒内牧場あり、土地宏大。一日見學を行ふ。

(十一月)

(タ)石狩旅行　石狩川鮭漁を見る。

(レ)記念會　月の中旬、記念會を行ひて、往時を偲び、黄泉の客となりし教師等を追悼す。

(十二月)

(ソ)奬勵會　月の下旬、盛大なる奬勵會を開き、教師生徒卒業生等、劇、お伽芝居其他を行ふ。數週間の準備をなすを常とす。

(一月)

(ツ)新年會　一日は卒業生在校生一同のため、三日は在校男生の爲、五日は在校女生の爲、新年會を行ふ。

(二月)

(ネ)雪戰會　雪は北海道の花也。郊外に出でゝ一同雪戰會をなす。

(ナ)豚汁會　學校の屋上の雪おとしに名をかりて、教師生徒一同、食事を共にす。

(三月)

(ラ)祭雛　手工科にて作りし紙雛を飾りて女生一同の雛祭を行ふ。

(ム)別離會　卒業式後、別離會を開きて、各自感想をのべていづれも落涙欄干。在校中の恩義と情愛とを回顧し、一年一度の悲哀を帶べる會合也。

右の内、各教師は時々其受持生徒を引ひて、郊外或は自己の私宅に招き、親睦を計り居れり。

(12)維持法　札幌農科大學講教授及札幌區有志の毎月定額の寄附金によりて維持す。各位の同情は下級社會子弟にとりては天來の福音也。

(13)校歌　本校には、本校獨特の校風と思想とを表現する校歌あれども、あまりに長きをもつて畧す。左に奬勵の歌と稱する唱歌を紹介す。

奬勵の歌

一、日毎止まず、業を勵み、夜毎うまず教問かば、望多き、行手なるよ、うれし我等、幸は待てり。

二、月に雪に、心恥ぢず、常に人の、道を踏まば、遠き友も、やがて來る、たのし我等、獨りならず。

三、櫂のさぼそ、朽ちし軒端、清き月は、さやに照らす、つゞれ着るも、心澄まば、たのし我等、うれしたのし。

(14)奬學賜金　本校へは毎年内務省より奬學賜金として二百圓宛、北海道廳より百内四外宛の賜金あり。本校維持上にとり、感謝にたへざる次第なり。

(15)將來に對する希望　現在は、只下級社會の子弟子女の教育のみをなし居れども、將來は尚進んで、實問彼等に相當なる職を授け、其活計の途を開き、長じて後其職によりて働をなし得るやう、學校に一種の職業會社を組織したき希望を有し居れども、一は、資本金無き爲と、一は、教師は實問學務多端なる爲とをもつて、尚其運びに至らずと雖も近き將來に於て、其完成を期し居れり。

三、結　論

夫れ社會政策たるや國家社會の樞要問題にして、其策を適宜に使用すると否とは、國家の經濟界金融界に及ぼす影響多

大、延いては道德の興廢、人倫の根源に感廣を及ぼし、一國の隆盛と衰亡とは一に此社會政策の如何に據る。社會政策を別ちて勞働問題と貧民救濟問題との二とす。殊に本邦の如き階級制度の盛なる國に於て、且つ、年々下流社會民の增加を來しつゝある國に於ては、貧民救濟は實に焦眉の問題にして爲政者の一日も忽諸に附すべからざる重大問題なり。貧民を救濟するに、金錢物品を給與して一時を糊塗するは、策の最も拙劣なる法にして、之は貧民を救助するに非ず、反つて貧民を尙其深所に誘導するもの也。吾人は宜しく彼等に敎育を授け、人格を築き、職業を與へて、「人」としての處世法を示さざるべからず。之實に萬全の策にして、國家の急務なり。

然るに、現今日本に於て、貧民敎育を授けつゝある設備や如何。否寧ろ日本に一定の社會政策ありや否やを、吾人は疑ふ者也。聞くならく、英國は世界中最も社會政策の進步したる國にして、その結果たるや、英人は誇りて曰く「英國民は總てゼントルマン也」と、吾人は現今の日本人のいかなる一員を捕へても、「人格ある人」なりと云ふを得ざるを悲み、英人の高言壯語に對して、多大の羨望を禁じ得ざる也。

幸にして、我が遠友夜學校は日本北門の下流社會の爲に其全力を擧げて働き、些細なりとはいへ、此愛する國家の爲に貢獻する所あるを期し、延いては世界人類の文明の水平線を微々たりとはいへ、高めつゝある事を誇りうるを喜ぶ也。然れども其方法に於て少からぬ缺點あるを信じ、博く斯界に經驗ある諸賢の御批評を乞ひ奉り、目的の貫徹を期するもの也

思ふに、大阪市の如き大都市にありては、殊に貧富の差劇しく、貧民子弟の數少なからざるを信ず。特に南區には貧民小學校二ケ校ありしやと覺ゆ。されども、百ケ校に亞んとする市內各小學校に於ては、貧民子弟を敎育し德化し、其體格を改良し言語を改善し、人格ある人とならしむるに、いかなる方法手段を講ぜられつゝありや。保育問題可也、小學校建築問題可也、敎員待遇問題可也、是れ皆敎育の大要也。然れども、吾人は尙進んで下流社會の敎育に多大の注意を拂はれむことを乞ひ願ふ次第也。如何とならば、國家に一且緩急ある際、身を堵して働くは少數の上流社會の人にあらず、全く中流以下寧ろ下流の多數民による。尙人類の目的たる進化とは、上層に位する少數民の文明進步を意味するに非ずして、人類の下層を形成せる社會が進步して、初めて向上するを得る也。若し上流の少數人のみ向上し、下層社會が下落せむかそは文明の進化にあらずして、文野の差を益劇しからしむるもの也。貧民敎育の主要なる實に此に存す。

以上記載せし我が遠友夜學校の記圖の一端が、若し大洋中に投ぜられたる、一介の石塊が起す波紋ほどにても可なり、ある刺戟を、我邦敎育界中に起すを得ば、稿者の幸これにしくもののあらんや。

余にとりて、恩惠深大なる大阪市の敎育界よ。乞ふ、余の意の有る所を斟酌せられて、若輩の言に耳を貸し玉はむことを。傲慢無禮の言、長者に對する失禮の句甚だ多きを、心より恐縮恐懼措く所を知らず、低く蹲身して筆を擱く。

奥付・付記

［書　名］**百余年前論文の真相を追う**―奇形児遠友夜学校の謎―

［初版発行］**2025（令和７）年１月15日**

［著　者］**白 佐 俊 憲**　（しらさ・としのり）

1937年10月生まれ。北海道北竜町出身。

北海道大学教育学部教育学科卒業。

現在、札幌市厚別区在住。遠友夜学校研究家。文筆家。

［監修者］**正 倉 一 文**　（まさくら・いちぶん）

1958年７月生まれ。東京都品川区出身。

北海道大学経済学部経済学科卒業。

現在、川崎市麻布区在住。随筆春秋事務局長。文筆家。

［発行元］**随筆春秋ポータル**　（電子出版）

［印刷委託先］製本直送ドットコム（希望者へ有料印刷販売）

［出版形態］電子出版（無料閲覧・ダウンロード可能）

［収録先］・国立国会図書館デジタルコレクション及び同サーチ

・随筆春秋ポータルサイト「飯名碧水の部屋」、ほか